

# 社会科好きの子どもを育てる授業モデルの研究

## ～学習意欲を高めるための効果的な地域教材の開発を通して～

高知市立介良小学校 教諭 谷田 憲一  
高知県教育センター 指導主事 竹内 満

近年の全国的な調査から、社会科を「あまり好きだと感じていない」子どもが全体の半数近くにのぼっている。社会科好きの子どもを増やすためには、興味をもって追究したくなるような魅力ある教材を開発し、習得した知識を活用する授業づくりを行うことが効果的な手立てであると考えられる。そこで本研究では、郷土の歴史的人物を教材化し、ワークショップ型の活動を取り入れた授業を展開することによって、児童が意欲をもって主体的に学ぶ授業づくりをめざした。開発した地域教材の検証授業を通して、教材の目標的価値や方法的価値について検証し、児童の学習意欲と指導方法との関わりを分析し、さらに改善することで、よりよい授業モデルの提案を行う。

キーワード： 学習意欲 地域教材 教材の価値 活用する力 ワorkshop型授業

### 1 はじめに

「平成 15 年度小・中学校教育課程実施状況調査」（国立教育政策研究所）の結果によると、社会科を「あまり好きだと感じていない」という子どもが、全体の 4 割を超えている。本来、社会科は、課題に対して、自らの生活と結び付けて、経験をもとに考えたり体験を通して調べたり友だちと話し合ったりして、考えを深めていく教科である。しかし、そのための指導方法の改善がなされず、効果的な教材や資料の準備ができなかったり、子どもたちの思考を深める手立てが十分でなかったりすると、教師による知識伝達型の授業になりがちである。その結果、子どもたちは授業で受け身になり、「社会科は面白くない」、「あまり好きではない」と感じるのではないかと考える。

このような観点で、これまでの私自身の実践を振り返ると、いくつかの課題が見えてきた。それは、①「学習で獲得した知識を活用して、お互いの思考を深めるための話し合い活動がうまく行えなかった」、②「子どもたちの興味を引き、思考を揺さぶる、効果的な教材や資料の準備ができなかった」、③「関心・意欲・態度の見取りが適切に行えず、評価がペーパーテストに頼りがちになり、個に応じた支援が十分に行えなかった」等である。そこで、本研究では、これらの課題の解決から一人でも多くの社会科好きの子どもを増やす有効な手立てについて研究を進め、子どもたちが意欲をもって主体的に学ぶ社会科の授業モデルの提案を行っていくこととする。

### 2 研究目的

小学校学習指導要領解説社会編（平成 20 年 8 月）には、「社会的事象に関する基礎的・基本的な知識、概念や技能を確実に習得させ、それらを活用する力や課題を探究する力を育成する」ことが明記されている。また、平成 19 年度実施の「特定の課題に関する調査（社会科）」（国立教育政策研究所）によると、調査結果における主な課題として、「多様な資料の中から問題を発見・把握する力が不十分であること」、「課題の解決策を表現したり、その理由を説明したりすることが不十分であること」が明らかになった。このような力を子どもたち自らが進んで獲得していくには、子どもたちの「学習意欲を高める」ことが大切であると考えられる。「学習意欲」に高まりが見られ、子どもたちの学びが主体的なものになれば、「社会科は面白い」、「社会科が好き」と感じる子どもたちが、きっと増えるであろう。そのためには、より子どもたちが興味をもって追究したくなるような教材の開発、授業における指導方法の改善など、学習意欲を喚起

する手立てが不可欠である。よってこれらの課題解決に向け、以下のような仮説を立てた。

社会科において、次のような手立てを取り入れた授業モデルに基づく授業を実践すれば、一人一人の学習意欲が高まり、社会科好きの子どもが増えるであろう。

- (1) 子どもたちが追究したくなる地域教材の開発
- (2) 活用する力を育てる授業づくり
- (3) 一人一人の子どもに対する丁寧な関心・意欲・態度の見取り

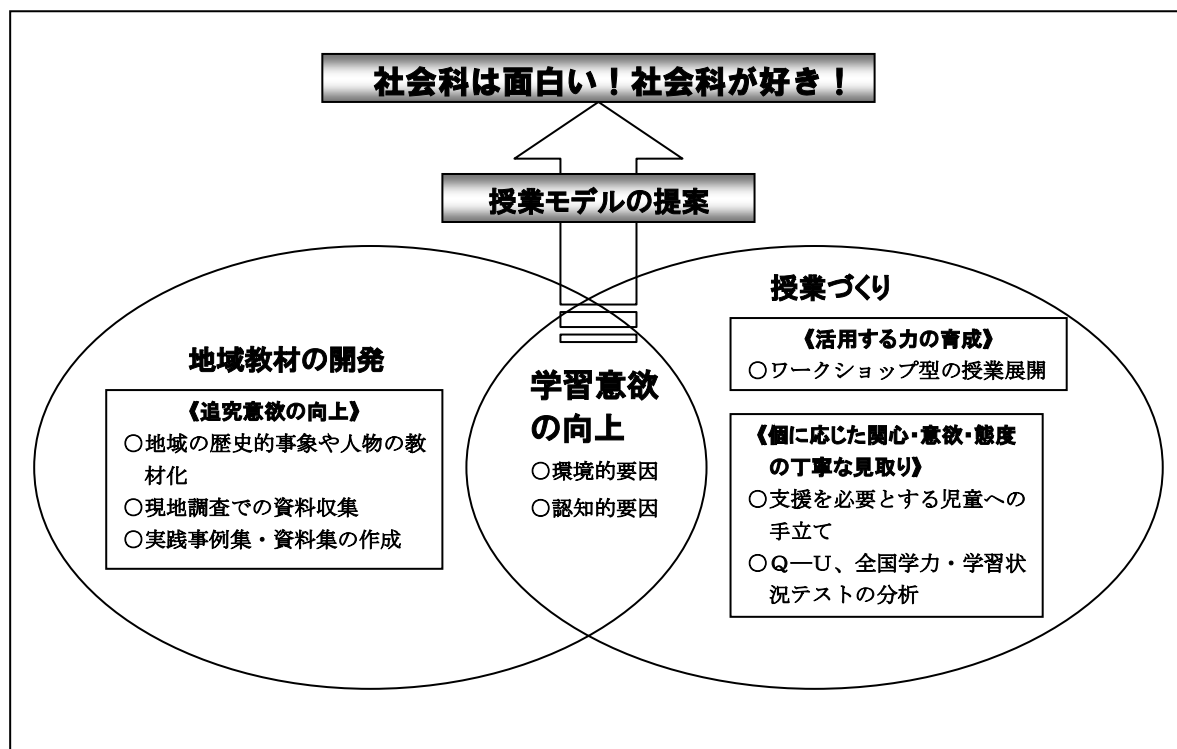


図1 研究構想

### 3 研究内容

#### (1) 理論研究

本研究では、子どもたちが追究したくなる効果的な社会科の教材開発を通して、一人一人の「学習意欲」を高めていくことを研究の柱としている。そこで、文献や先行研究をもとに、本研究における「学習意欲」や「追究意欲」のとらえ方についての考察を行った。

##### ア 学習意欲の定義

心理学において、「学習意欲」という言葉の明確な概念規定はなされておらず、研究者によってとらえ方はさまざまである。桜井（1997）は、「学習意欲」という言葉の概念について、「勉強や仕事といった、知的なことを達成しようとする行動を起こすもの」と説明している。その中で「自発的」に行われるものが「内発的意欲」であり、これが「学習意欲」とあると述べている（1）。柴山・小嶋（2006）によると、「自発性」とは、他からの教示や影響によらず、内部の原因や力によって思考や行為がなされることであり、学習活動における「自発性」とは、「学習に自らの意思で積極的に取り組むこと」である。また、子どもたちの「学習意欲」に影響を与える要因としては、教材や指導方法などの環境的な要因と、個人に内在する認知的な要因が考えられると述べている（2）。本研究では、この「環境的要因」と「認知的要因」について、以下のようにとらえ、子どもたちの「学習意欲」の高まりを見取っていくことにした。

(ア) 「環境的要因」について

子どもたちが自らの意思で、学習に積極的に取り組むための環境的な要因とは、子どもたちの興味や関心にせまる教材や資料によって、学習内容を他人事ではなく、自分のこととしてとらえさせることや、一人一人がはっきりとした目的意識をもち、主体的に活動する学習をめざした指導方法の改善を行うことではないかと考える。

(イ) 「認知的要因」について

桜井（1991）らの先行研究からは、学習に対して「やってみよう」、「やればきっとできるだろう」という子どもたちの自信が、課題解決や学業達成に大きな影響を与え、「学習意欲」を喚起する重要な要素となっていることがわかる（3）。したがって、子どもたちが自信をもって、意欲的に学習に取り組むためには、授業の中で「自分の力がアップした」と感じられるような学習展開を常に仕組んでいくことが必要なのではないかと考える。

イ 追究意欲の定義

安野（2006）は、「学ぶ意欲」を高めるためには、子どもたちを未知の世界に出会わせ、「不思議だ」「どうなっているのかな」など、子どもたちの「知的好奇心」を高め、それを自ら探究していく学習経験を積み重ね、歴史を学ぶおもしろさを味わわせていくことが大切であると述べている（4）。この「知的好奇心」について辰野（1977）は、知的なこと（知識や理解など）について、変わったことや珍しいことを見たり聞いたりして、知りたいと思う気持ちであると定義している（5）。

本研究では、教材の開発や指導方法の工夫・改善を行うことで、子どもたちに「あれ？」「どうして？」という疑問をもたせ、思考を揺さぶることが大切であると考えた。そこで、本研究における「追究意欲」とは、「知的なこと（知識や理解）に対して、子どもたちが『もっと知りたい』『もっと調べたい』『解決したい』等の内的動機に裏付けられた問題意識をもち、意欲的に課題解決に向かおうとする状態」ととらえ、研究を進めた。

(2) 実践研究

ア 子どもたちが追究したくなる地域教材について

子どもたちの「もっと知りたい」、「もっと調べたい」という追究意欲を高めるためには、身近な地域の素材を学習で取り上げることが、効果的な方法であると考えた。地域の歴史的事象や人物の教材化を進め、郷土出身の歴史上の人物を学習することによって、歴史学習に対する関心が高まり、郷土への誇りや愛着が生まれるのではないかと考える。本研究では、こうした地域教材のよさを、以下の4点でとらえた。

- (ア) 地域の素材は子どもたちにとって身近であり、親近感をもちやすい。
- (イ) 自分とのかかわりを意識しながら、主体的に取り組むことができやすい。
- (ウ) 自分の育った地域に対する誇りや愛情を育むようになる。
- (エ) 出会いがある。地域との豊かな出会いを、子どもたちに仕組むことができる。

そこで、本研究では、6年生の歴史学習に焦点を当て、教材化が可能な地域の歴史上の人物を調査・研究し、子どもたちが興味をもって追究したくなる地域教材の開発を行う。併せて、現地調査による資料収集や、開発した地域教材をもとに、授業実践事例集や資料集の作成も行っていくこととした。

イ 活用する力の育成について

上条（2005）は、ワークショップ型授業を短い言葉で定義すると、「自由感のある『活動』を通して学ぶことで、関心・意欲・態度を基礎とした主体的な学びの力を育てる授業方法のことである」と述べている（6）。このワークショップ型授業においては、学習者は、自分なりの試行錯誤を繰り返すことによって、主体的に思考を深めていく。よって、ワーク

ワークショップ型授業を取り入れた授業づくりは、本研究テーマにせまるために、大変効果的な手立てであると考え。

授業の中で、獲得した知識や情報を活用する場を設定することによって、子どもたちは、学習内容を他人事ではなく、自分のこととしてとらえ、主体的に学習ができるのではないだろうか。また、調べたことをもとに、比較（比べる）・関連付け（つなげる）・総合（まとめる）しながら、自分の考えを表現することが、活用する力の育成につながると考え、それを効果的に行うための指導方法として、ワークショップ型の活動を取り入れた授業を展開することにした。

#### ウ 一人一人の子どもに対する丁寧な関心・意欲・態度の見取りについて

支援を必要とする児童の実態を授業者がしっかりと把握し、必要な手立てを講じることは、社会科に限らず大切なことである。子どもたちにどのような力をつけていくのか、そのためにどのような支援が適切なのか、学習のねらいを明確にし、授業中の子どもたちとの直接的なやり取り（コミュニケーション）、行動観察（授業中の見取り・ビデオ観察）自己評価、ふり返りカード等を通して、それぞれの学びに対して、その都度、すばやく効果的に評価を行い、学びを改善・修正することによって、丁寧に見取っていくことにした。

また、学力テスト・Q-Uとの相関関係や学級担任との情報交換により、児童の実態を把握した後、支援を必要とする児童への手立てを考え、学習後の児童の変容について検証を行うことにした。

#### エ 学習意欲の向上について

検証授業では、自由民権運動における郷土出身の三人のヒーローを取り上げた地域教材の開発や、ワークショップ型の活動である「ヒーローインタビューバトル」(7)を行うことで、子どもたちがより主体的に学んでいけるような活動を仕組んでいく。その中で子どもたちが教材に興味・関心を持ち、学習の面白さや達成感を実感できるような授業を展開していくことを考えた。そして、これらのことが果たして子どもたちの「学習意欲」にどのような影響を与えたのかについて明らかにしていくことにした。

## 4 検証授業

### (1) 検証授業の概要

ア 単元名 「自由民権運動が広がる」（教育出版 6年上）

イ 開発教材名 「自由は土佐の山間より」

ウ 授業の概要

前述の「特定の課題に関する調査（社会科）」（国立教育政策研究所）から、歴史上の人物と業績についての問いに対し、同時代に活躍した人物が多い場合や分野が似ている場合、正答率が低い傾向（特に、幕末・明治時代）にあることが明らかにされている。このことから、明治時代の自由民権運動において、先駆性、指導性に優れた優秀な人材を高知県が数多く輩出していることに着目し、郷土出身の人物の理解を深めていくことを中心に、課題の解決に向け、教材開発に取り組むことにした。

ここでは、立志社を創立して、自由民権運動の全国的な指導者となった板垣退助（学習指導要領例示人物）、日本の婦人参政権運動の草分け的存在であった楠瀬喜多、土佐の自由民権運動を象徴する「自由は土佐の山間より出づ」という言葉を残した植木枝盛を取り上げる。これら三人の郷土出身の民権運動家たちは、国会開設や憲法制定などの日本の近代化に対し、非常に大きな役割を果たした。

指導にあたっては、気づいたことや獲得した知識を活用しながら、学習問題を追究・解決していく活動を重視するために、ワークショップ型の活動の一つである「ヒーローイン

「タビューバトル」を取り入れることにした。


子どもたちは、二人一組でチームを作り、調べたことを活用し、郷土出身の三人の民権運動家に対してのインタビューの内容を考えていく。そして、それぞれの人物の業績や願い、エピソードなどを盛り込みながらシナリオにまとめ、対戦形式で行うことで、お互いの発表を聞き合い、自分と異なった考えに出会う。そうした体験によって、新たな発見や気づき生まれることから、より主体的に学ぶことができるようになり、「社会科は面白い」、「社会科が好き」と感じるのではないかと考えた。

#### ◇授業の展開


1/4 時間目の活動

○板垣退助・楠瀬喜多・植木枝盛について調べる。

高知県における自由民権運動のヒーローたちを調べよう。



資料を使って、三人のことをくわしく調べました。



やっぱり、高知県ってすごいんだな！  
高知に生まれてよかった！



本時のポイント

- ・導入で、プロ野球選手の「ヒーローインタビュー」のビデオを視聴し、「ヒーローインタビューバトル」のイメージを持たせることにより、学習への興味・関心を高め、学習の目的を明確に示す。
- ・資料を読む時間を十分に確保し、自分が一番すごいと思った点について、ペアで話し合う。話し合いの中心を焦点化することによって、話し合いの活性化、知識・理解の習得を図る。

2/4 時間目の活動

○「ヒーローインタビューバトル」のシナリオ作りを行う。

三人のヒーローたちの業績を、「ヒーローインタビューバトル」のシナリオにまとめよう。



ペアで相談しながら、シナリオ作りを行いました。

みんなに伝えるようにがんばろう！


本時のポイント

- ・インタビューの方法のパターン（エピソードを中心に構成する方法・聞き手に投げかけを行う方法）を示し、多様な発表が行えるようにする。
- ・シナリオ作りのポイントを提示し、活動がスムーズに行えるようにする。


3/4 時間目の活動

○「ヒーローインタビューバトル」を行う。


それぞれの人物になりきって「ヒーローインタビューバトル」をしよう。



板垣さん、一言どうぞ！



板垣死すとも自由は死せず！



どのチームに投票しようかな？

本時のポイント

- ・投票の際の観点を明確に示すことにより、インタビューの内容を重視した投票が行われるようにする。
- ・それぞれの発表に対する感想や投票の理由を述べる時間を十分に確保することによって、相互評価を行うようにする。

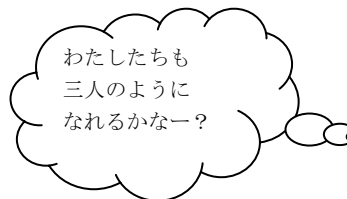
4 / 4 時間目の活動

○これまでの学習をふり返り、学習のまとめをする。

自由民権運動と現在の私たちの生活とのつながりについて考えよう。



「自由は土佐の山間より」には、どんな願いがこめられているのでしょうか？



わたしたちも三人のようになれるかなー？

本時のポイント

- ・ワークシートへのまとめの記述の際、書き出しやまとめ方等の話型を提示することで、支援の手立てとする。
- ・全体で練り合う場面の時間を十分に確保することで、子どもたちの言葉から学習のまとめを行う。

◇児童作成のシナリオ

インタビューの内容	( 植木 枝盛 ) コメント
<p>それでは、自由民権運動における最高の理論的指導者といわれる「植木枝盛」さんにお話を聞かせてもらいます。よろしくをお願いします。</p>	<p>よろしくをお願いします。</p>
<p>植木さんが 1881 年に起草した「東洋大日本国国憲按」は、どのような内容だったんですか。</p>	<p>えーとですね、「東洋大日本国国憲按」は、現在の日本国憲法 103 条をはるかにしのぐ、202 条で構成されています。当時の私擬憲法の中では、最も民主的・急進的な内容でした。</p>
<p>仕上げるのに、どれぐらいかかりましたか。</p>	<p>わたしが若い若い 24 歳のとき、1881 年の 8 月 28 日、29 日の二日間で仕上げました。</p>
<p>すごいですね。たった二日間で 202 条もの憲法を仕上げたんですか。</p>	<p>そうなんです。 ちなみに、202 条を大きな形にまとめると、第 18 編もあるんですよ。</p>
<p>じゃあ、植木さんの考えが憲法に使われたんですね。</p>	<p>それが、そうではないんですよ。すでに政府は伊藤博文を中心に、皇帝の権限の強いドイツの憲法を参考に憲法づくりを始めていたんだよ。</p>
<p>政府の考えは公開されなかったんですか。</p>	<p>そうなんだ。政府の案は国民にはいっさい公開されないまま、1889 年に、明治天皇が国民に与えるという形で、「大日本帝国憲法」として発布されたんだ。</p>
<p>残念でしたね。 続いてなんですが、「民権かぞへ歌」や「海南新誌」というものを出したそうなんですが、まず、どうして「民権かぞへ歌」をつくったんですか。</p>	<p>はい・・・。 わたしの民権の考えを広めていきたい、いろいろな人たちに興味をもってもらおうと思ったからです。「民権かぞへ歌」は全部で二十とせあります。その中でも、わたしは特に、「三つとせ 民権自由の世の中に まだ目のさめない人がある このあはれさよ」というところを伝えたいですね。理由は、この世の中にまだ民権に目覚めていない人がいるということ強く知らせたかったからです。</p>
<p>その輪は全国に広まりましたか。</p>	<p>はい。「海南新誌」という本で、自由民権運動をこの土佐の国から全国へ広めていきました。</p>
<p>よかったですね。以上で、植木枝盛さんのヒーローインタビュー・・・</p>	<p>いや、ちょっと待ってください。そのとき、自由民権運動を全国へ広め、自由な国、日本をつくってほしいという願いをこめ、『自由は土佐の山間より出づ』と書きました。</p>
<p>その言葉は、高知市の自由民権記念館の展示室でも紹介されているそうですよ。みなさんもぜひ行ってみてください。</p>	<p>そうなんですか。それはうれしいですね。</p>
<p>よかったですね。以上で、「植木枝盛」さんへのヒーローインタビューを終わります。ありがとうございました。</p>	<p>ありがとうございました。</p>

## (2) 検証授業の分析

子どもたちの学習意欲と、教材や指導方法との関わりについて、その結果の分析を行った。その際、「教材化の価値の視点」に基づいて、授業者・参観者による授業評価票、児童のふり返しカードの分析により、本教材の「教材化の価値」について検証した。

1 開発した授業モデルについて
(1) 子どもたちが追究したくなる地域教材であったか
ア 本教材の教材化の価値について
(ア) 目標的価値について
(イ) 方法的価値について
(2) 活用する力を高めることができていたか
(3) 授業改善に向かう検証授業の方法について
2 学習意欲の向上について
(1) 児童の学習意欲の高まりについて
(2) 支援を必要とする児童の変容について

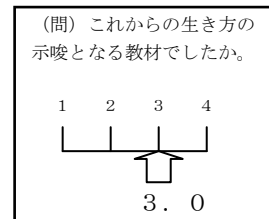
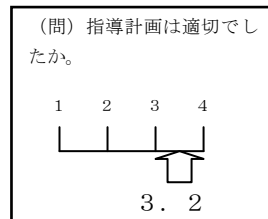
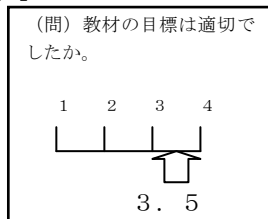
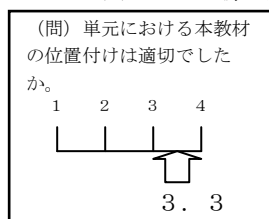
図2 検証内容の分析

目標的価値	<ul style="list-style-type: none"> <li>単元の目標と合致しているか</li> <li>学習指導要領例示の42人の人物とのかかわりはどうか</li> <li>歴史的事象と地域とのかかわりはどうか</li> <li>これからの生き方の示唆となるものか</li> </ul>
方法的価値	<ul style="list-style-type: none"> <li>調査活動の可能性について</li> <li>根拠資料の存在について</li> <li>親近感の有無</li> <li>(人物を身近に感じることで、歴史学習の興味・関心を高め、郷土に対する誇りや愛着をもたせることができるか)</li> <li>共感的要素の有無</li> <li>(人物の業績に着目することで、その考えや果たした役割などに共感することができるか)</li> </ul>

図3 教材化の価値の視点(8)

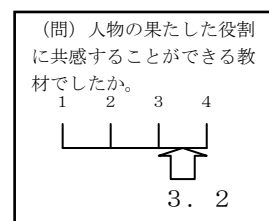
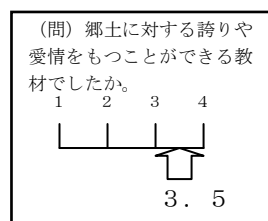
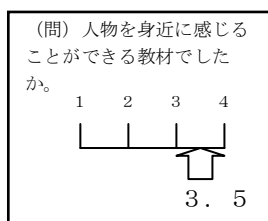
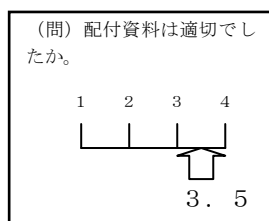
### ア 授業者(2・3組担任)、参観者による授業評価票より

#### (ア) 「目標的価値」について



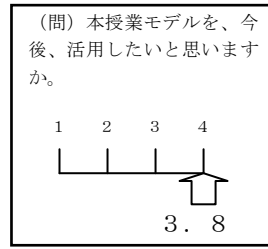
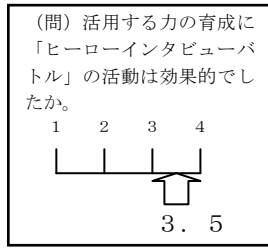
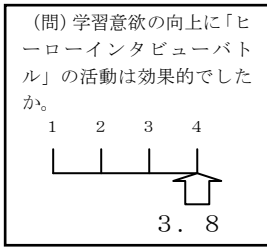
本県出身の三人の人物を深く取り上げた学習を、本単元に位置付けたことによって、児童は、当時の郷土の人々の思いや願いを知ることができた。また、そのことが、子どもたちの興味を引きつけ、地域に対する関心をもつよいきっかけともなった。しかし、本教材の年間指導計画への位置付けが明確でなかったことや、人物の生き方や思いにもう一步思考を向かわせるための手立てが弱かった点について課題が残った。

#### (イ) 「方法的価値」について



配付資料がわかりやすく、よく整理されていたために、三人の人物について子どもたちは自分の力で調べることができた。また、「ヒーローインタビューバトル」の活動では、調べた人物になりきって、インタビューを行うという設定を仕組んだことによって、多くの児童が自分から進んで学習を行うことができていた。そして、学習中の子どもたちからは、「高知はすごい！」といった声が自然と聞かれ、郷土に対する関心を深め、愛情を育てていくよいきっかけとなったのではないかと考える。これらのことから、本教材は「教材化の価値の視点」に基づく「方法的価値」を十分伴っていたと言えるのではないかと考える。

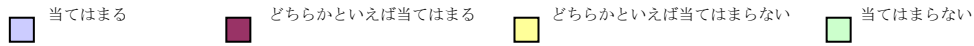
(ウ) 授業モデルについて



子どもたちが人物について調べたことや考えたことを、自分の言葉で表現するということについて、「ヒーローインタビューバトル」の活動は、大変効果的であった。また、「ヒーローインタビューバトル」の活動は、児童の興味・関心を引きつけ、主体的に学ぶための手立てとしても有効であったのではないかと考える。結果、本授業モデルについては、今後も活用していく価値を伴ったものであると考える。

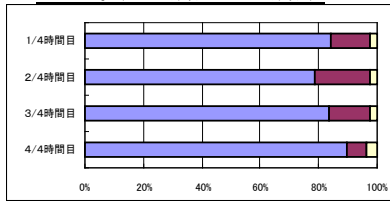
イ 児童のふり返しカードより

※質問に対して、「当てはまる」「どちらかといえば当てはまる」という回答を、肯定的評価としてとらえた。

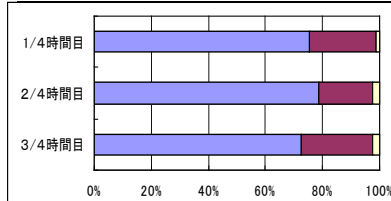


(ア) 追究意欲の高まりについて

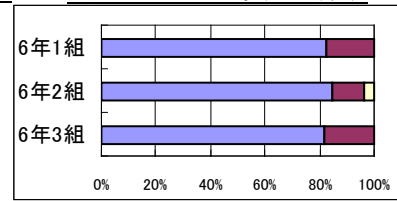
(問) わくわくした気持ちで、今日の学習に取り組まされたか。(1/4時間目～4/4時間目)     
 (問) 三人のヒーロー(板垣・植木・楠瀬)について、もっと知りたいと思いましたか。(1/4時間目～3/4時間目)     
 (問) その他の高知県出身の人物について、調べてみたいと思いましたか。(4/4時間目)



肯定的評価  
 $84.0\% + 13.2\% = 97.2\%$



肯定的評価  
 $75.6\% + 22.3\% = 97.9\%$



肯定的評価  
 $82.9\% + 15.8\% = 98.7\%$

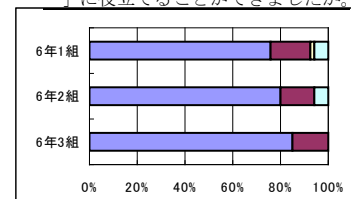
グラフ1 追究意欲の見取り

児童は配付資料を中心に、自分の力で人物について調べることができていた。シナリオ作りの際には、配付資料以外にも、教科書や資料集、図書室の書物、インターネットで検索した情報などを活用しながら、上手にシナリオを作成したチームが多かった。結果、追究意欲を見取る質問に対して、1時間目から4時間目まで、三クラスともほぼ全員が「わくわくした気持ちで学習に取り組めた」、「三人についてもっと調べたい」、「その他の高知県出身の人物についても調べてみたい」と回答している。学習中の発言や、授業後の感想の記述にも、こうした子どもたちの意欲が表れており、本教材の学習においては、子どもたちが「もっと知りたい」、「もっと調べたい」と、意欲的に課題解決に向かう姿が数多く見られた。これらのことから、本教材は子どもたちにとって、追究したくなる魅力ある教材であったといえるのではないかと考える。

(イ) 活用する力の高まりについて

実際の「ヒーローインタビューバトル」の発表では、配付資料から調べたことをもとに、教科書の内容とうまく絡めながら、人物の業績や考えをわかりやすく丁寧に伝えることができたチームや、教科書や配付資料だけに頼らずに、自分たちで調べてきた新たな情報を盛り込み、インタビューを構成したチームが、聞き手の高い関心を集めたことがわかった。

(問) 調べたことを「ヒーローインタビュー」に役立てることができましたか。



肯定的評価  
 $80.0\% + 15.5\% = 95.5\%$

グラフ2 活用する力の見取り

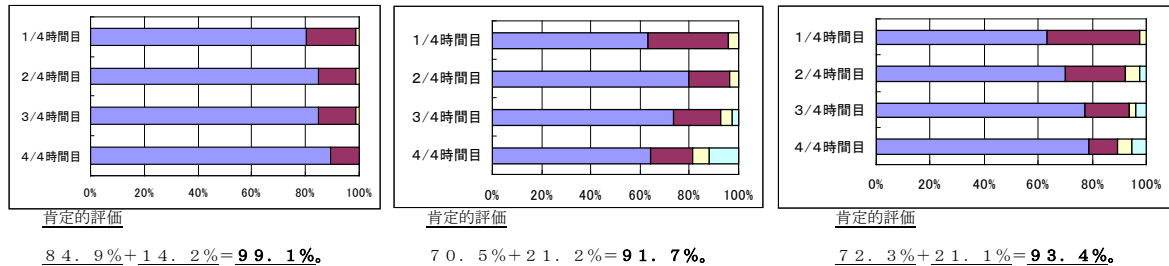


また、それぞれのチームが披露したインタビューを聞くことによって、自分が直接調べていない人物の業績や考えについてもよく理解できたことが、学習中の発言や授業後の感想の記述の分析からわかった。

これらのことから、本教材における「ヒーローインタビューバトル」の活動は、子どもたちにとって、新しい発見や気づきを生む効果的な方法であったといえる。結果、獲得した知識を学習の中で生かす場面の設定を意識した本教材の学習によって、子どもたちの「活用する力」の育成を図ることができたのではないかと考える。

#### (ウ) 学習意欲の高まりについて

(問) 楽しく学習することができましたか。 (問) 自分から進んで学習することができましたか。 (問) 今日の学習で、自分の力がアップしたと思いますか。



グラフ3 学習意欲の見取り

ほぼ全員が毎時間、「楽しく学習できた」と回答している。「自分から進んで学習できた」児童や、「自分の力がアップした」と感じている児童も、全体の9割を超えていることから、児童は、楽しく意欲的に学習ができたと考える。

その理由としては、郷土出身の歴史上の人物の学習が、子どもたちの興味・関心を引いたことや、「ヒーローインタビューバトル」の活動が、子どもたちの主体的な学びを生み出す指導方法として、大変効果的であったことが挙げられる。

また、授業後のアンケートや感想の分析から、児童が「自分の力がアップした」と感じた場面は、主に次の三つの場合であることがわかった。一つ目は、学習を通して、新しい発見や気づきがあったときである。今回の検証授業では、三人の人物について調べる際に、補助資料を使用し、教科書にはのっていない内容まで調べることができた。自分がこれまでに知らなかったことをくわしく知ることができたときに、大半の児童が自分の力がアップしたととらえている。二つ目は、自分の力で調べることができた、自分から進んで意見が言えた、自分の力でシナリオが作れた、といった主体的な活動を行うことができたときに、自分の力がアップしたと感じる児童が多かった。三つ目は、前時の学習を生かしてシナリオ作りを行えた、インタビューをすることによって、人物のことがよりくわしくわかった、友だちのインタビューを聞くことによって、他の人物のこともくわしくわかったというような、習得した知識や情報を活用する場面において、子どもたちの意識の高まりが見られた。

#### ウ 授業改善の方法について

よりよい授業モデルの開発のために、毎時間の学習を、1組（研究生本人による授業）、2組（担任による授業）、3組（担任による授業）の順で行い、各授業後の協議、児童のふり返しカードの分析から、本時のねらいの達成における課題を整理し、次時の授業展開に生かしていった。

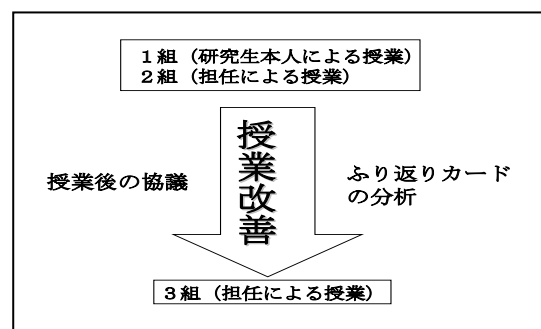
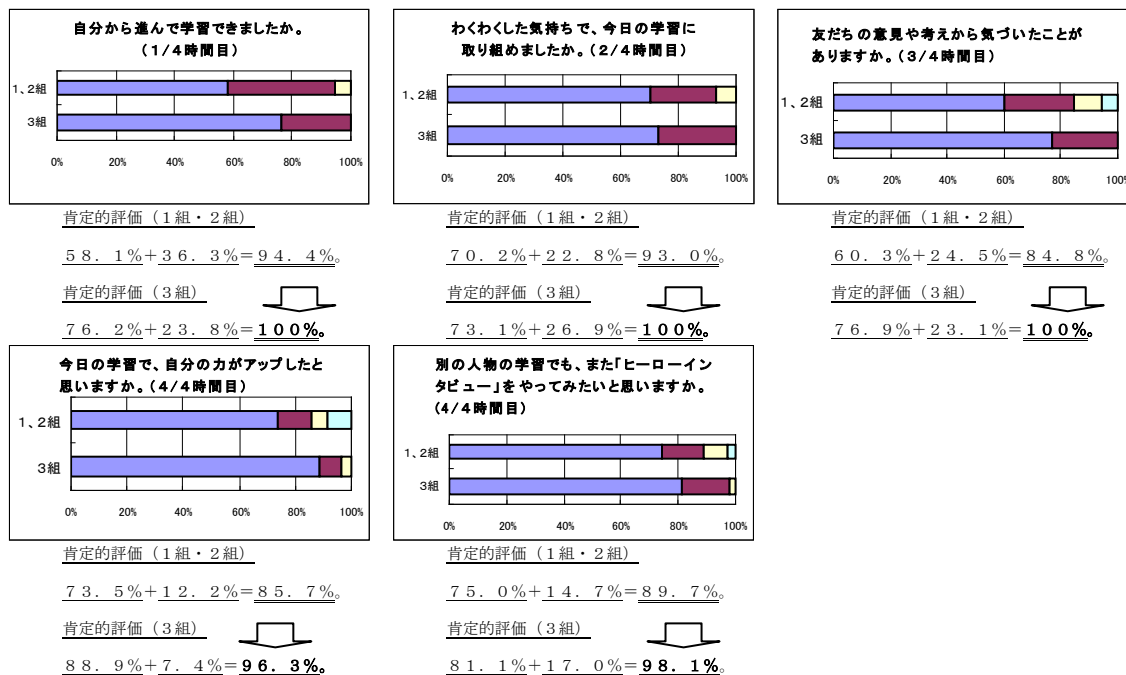


図4 授業改善の方法



グラフ4 授業改善前（1組・2組）と改善後（3組）のアンケートの比較

1組・2組の授業における課題を分析・整理することによって、3組では、指導方法の工夫や改善を行った結果、グラフ4に示してあるように、1組・2組の児童と、3組の児童との間には、学習に対する気持ちの高まりに、明確な差が生じたことがわかった。このことから、授業の導入を工夫することによって、児童に学習の目的をはっきりと示したことや、話し合いの場面において、話の中心を焦点化したことが効果的であったといえる。また、ワークシートへの記述の際、書き出しの言葉やまとめ方等の話型を示したことによって、一人一人の学習を、より主体的なものへと導くことができたと考える。

エ 支援を必要とする児童の変容について

本検証授業では発展教材を取り扱うこともあり、支援を必要とする児童の実態を、授業者がしっかりと把握しておくことについて、特に意識した。その際、Q-Uや全国学力・学習状況調査の分析の結果、学級担任との情報交換によって、丁寧に児童の見取りを行い、支援を必要とする児童への手立てについて考えた。そして、授業中のどの手立てによって、どのような変容が児童に見られ、児童の学習意欲の向上に効果があったのかについて、検証を行った。

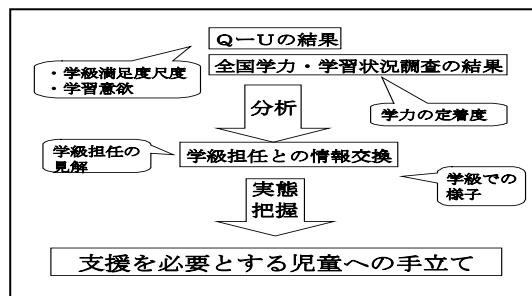


図5 支援を必要とする児童への手立て

(ア) 児童Aについて

全国学力・学習状況調査の結果から、学力の面で支援を必要とする児童Aは、学級担任の見取りによると、日頃から学習に対する意欲があまり感じられない児童である。

肯定的評価4 ⇔ 否定的評価1

	1/4時	2/4時	3/4時	4/4時
(問) 楽しく学習できましたか。	4	4	4	4
(問) 自分からすすんで学習できましたか。	4	2	4	4
(問) 今日の学習で、自分の力がアップしたと思いますか。	4	3	4	3
(問) 別の人物の学習でも、また「ヒーローインタビュー」をやってみたいと思いましたか。			4	4

図6 児童Aの自己評価

そこで、本授業では、まず、児童Aに対して、資料に書かれてある言葉や用語が理解しづらいと考え、机間指導の際、その説明を丁寧に行った。また、楠瀬喜多の業績について調べていた児童Aに、全員に配付した全体の流れを示した年表以外に、喜多の生涯や業績についてのみ記載してある年表をヒントとして渡した。これらのことから、児童Aは、資料を用いて人物を調べる学習に、意欲的に取り組むことができた。また、授業中、わからないことや困ったことがあると、自分から質問をしたり、積極的に発言をしたりする姿が見られた。そして、毎時間、肯定的な自己評価を行っている。このことは「学習した三人以外のいろいろな郷土出身の人物も調べてみたい。歴史のことがもっと知りたい。」という感想からもわかるように、児童Aにとっては、郷土出身の歴史上の人物について、何より自分の力でしっかりと調べることができたこと、そして、そのことによって、人物や歴史事象を身近にとらえられたことが、学習意欲の高まりが見られた一番の要因であると考えられる。

肯定的評価 4 ⇔ 否定的評価 1

(イ) 児童Bについて

全国学力・学習状況調査の結果や、Q-Uの分析、学級担任の見取りから、児童Bは、学力面、生活面において、常に支援を必要とする児童である。

	1/4 時	2/4 時	3/4 時	4/4 時
(問) 楽しく学習できましたか。	4	4	3	4
(問) 自分からすすんで学習できましたか。	3	3	3	3
(問) 今日の学習で、自分の力がアップしたと思いますか。	3	2	4	4
(問) 別の人物の学習でも、また「ヒーローインタビュー」をやってみたいと思いましたか。			4	4

図7 児童Bの自己評価

何事に対しても受け身がちな児童Bに対しては、作業の際、「～ができてるね。」「～ができたね。」といった声かけを毎時間、行うようにした。そして、シナリオ作りの時には、「ヒーローインタビューバトル」の活動に向けて参考にしてもらおうと、豊臣秀吉のシナリオや発表の時のポイントが書かれてあるワークシートを渡して、発表に備えた。発表は、小さい声ではあったが、最後までしっかりとやり通すことができた。

その結果、「今日の学習で、自分の力がアップしたと思いますか」という問いに対して、3/4時間目と4/4時間目に「アップした」と答えている。これは「ヒーローインタビューバトル」の活動において、友だちの前で発表できたこと、友だちの発表をしっかりと聞いたことによって、学習に対しての自分なりの手ごたえを、児童Bが感じるようになったからであると考えられる。「別の人物の学習でも、またヒーローインタビューを行ってみたい」という回答からも、本教材の学習が、「やってみよう」「やればできるんだ」という児童Bの自信につながり、意欲の向上が見られたのではないかと考える。

オ 成果と課題

(ア) 成果

- a 郷土出身の人物を取り上げた地域教材やワークショップ型の活動を取り入れた授業は、児童の学習意欲を高める効果があった。
- b 地域教材の学習は、歴史学習や郷土に対する興味・関心をもつきっかけとなり、学習後の児童からは、郷土への愛着や誇りが感じられた。
- c 自分で調べ、発表する活動を通して、郷土出身の人物を身近に感じることで、学習内容に対する追究意欲が高まりが見られた。
- d 「ヒーローインタビューバトル」の活動は、児童が習得する力を活用する場として効果的であった。

これらのことから、本授業モデルにおける地域教材の開発や「ヒーローインタビューバトル」の活動、児童の丁寧な見取り、授業改善の方法には、児童が自分の力がアップ

したと感じられる「新しい発見や気づき」「主体的な活動」「習得した知識や情報の活用」が、学習展開にしっかりと仕組まれていたために、児童の学習意欲の高まりに効果があったのではないかと考える。したがって、本授業モデルは、「教材化の価値」を十分に伴った実践であったのではないかといえる。

(イ) 課題

- a 子どもたちへの段階的な指導及び手立てにおいて、不十分な点があり、教師の説明が長くなる場面があった。
- b 学習内容や資料の精選が十分にできておらず、児童の思考の流れにそった学習展開とならない場面もあった。提示資料については、調べ学習の手助けになればと、数多くの資料を提示してしまったことによって、児童の思考が広がりすぎてしまい、焦点化に向かえなかった。さらに吟味・精選を行い、中心資料をもとに発問を考え、授業を組み立てていく必要性を強く感じた。

5 授業実践事例集の作成

本研究で開発した授業モデルについて、授業実践事例集を作成した。本事例集には、学習指導要領に基づき、教科書単元の発展学習として開発した地域教材の学習指導案（展開例・指導の実際等）、資料（写真・年表・エピソード等）、ワークシートを掲載している。実践する際には、児童の実態や教材、学習のねらいに応じて、活用することができる。また、各学校の学習時間等に応じて、アレンジを加える等、部分的に活用したり、手法として参考にする等、工夫して活用することができる。

(1) 授業実践事例集Ⅰ 「土佐の出来人 長宗我部元親」

本地域教材は、6年生社会科の「全国統一への動き」（教育出版6上）の学習の発展教材として位置付けをしている。本地域教材の学習では、郷土出身の戦国大名である長宗我部元親の業績や考えを学ぶことによって、歴史学習や故郷に対する興味・関心を高めることをねらいとしている。

指導方法としては、獲得した知識や情報をもとに、学習問題を追究・解決していく活動として、単元の終わりに「長宗我部元親すごろく」を作成し、活用する場面の設定を行った。すごろくを完成させるためには、獲得した知識や情報が必要である。また、完成したすごろくで、友だちと繰り返し遊ぶことによって、知識・理解の定着が図れるのではないかと考えている。

(2) 授業実践事例集Ⅱ 「自由は土佐の山間より」

本地域教材は、6年生社会科の「自由民権運動が広がる」（教育出版6上）の学習の発展教材として位置付けを行った。自由民権運動における郷土出身の三人の民権運動家（板垣退助・楠瀬喜多・植木枝盛）の業績や思いについて理解し、自由民権運動と現在の私たちの生活との結びつきについて考えることを通して、郷土に対する誇りや愛着をもつことをねらいとしている。

そのための効果的な学習方法として、ワークショップ型の活動である、「ヒーローインタビューバトル」を取り入れている。この学習では、三人のヒーローについての資料集をもとに、それぞれが調べた人物になりきって、その業績や思いについて考えることができるような活動を仕組んでいる。また、指導者の柔軟な発想や工夫によっては、自由民権運動を支えたたくさんの名も知れぬ人々について考えることもでき、子どもたちの学びを広げていく可能性のある教材である。

## 6 成果と課題

### (1) 成果

本研究において開発した教材を使った授業では、多くの児童が興味・関心を示し、自らの意思で進んで学習に参加することができた。郷土出身の人物を取り上げた地域教材の学習は、歴史学習に対する興味・関心をもつきっかけとなり、学習後の児童のふり返しからは、郷土への愛着や誇りが感じられた。そして、ワークショップ型の活動である「ヒーローインタビューバトル」を取り入れた授業は、児童が習得した力を活用し、学びを深めていく場として、大変効果があった。

結果、ほとんどの児童が「楽しく学習ができた」、「自分から進んで学習ができた」、「もっと知りたい、もっと調べたい」、「自分の力がアップした」と感じており、本研究において開発した授業モデルによる取組は、児童の学習意欲を高めるために効果的であった。また、検証授業を行う上で、授業中の児童の様子や手立ての検証を行い、つぶさに改善を重ねたことは、児童の意欲を高めるためのよりよい授業モデルの研究に向け、大変有効であった。

### (2) 課題

本研究において開発した授業モデルの年間指導計画への位置付けについては、各学校の実態等に応じて、他教科および総合的な学習の時間と関連付けた工夫が必要である。それは、このような学習で育んだ子どもたちの追究意欲を、地域や社会事象に対する探究心へとつないでいく時間を十分に保障することが重要であるからである。また、地域教材を取り上げた本教材の学習が、単に地域社会の学習にとどまることがないように配慮しなければならない。そして、新学習指導要領にも示されているように、郷土や人物に対する興味・関心を高め、さらに学びを広げていく手立てとして、地域の博物館や資料館の活用を行う等、子どもたちが自ら地域へ飛び出し、その目で見、その耳で聴き、その足で確かめ、探究の扉を開いていけるような活動を積極的に仕組むことによって、一人でも多くの社会科好きの子どもたちを増やしていくことが大切である。

## 7 終わりに

資料を使って一生懸命調べている真剣な表情の子ども。いろいろなアイディアを出し合いながら、楽しそうに友だちとシナリオをつくる子ども。緊張しながらも、精一杯伝えようと必死に頑張る子ども。発表がうまくいかず泣き出してしまった子ども。なんとか発表を終えて、ほっとした表情を見せる子ども。でも、最後にはどのクラスも、みんな笑顔で学習を振り返ることができていた。授業後、「今日は三人のことがよくわかったので、なんだかうれしかったです。私たちが生まれた、この高知県出身の別の人物についても、いろいろ知りたい、もっと調べたいな一と思いました。」という感想が見られた。このように「もっと調べたい」「もっと知りたい」という意欲を子どもたちにもたせるために、指導方法を工夫・改善していくことは、社会科好きの子どもを育てる第一歩であると考えます。「社会科は面白い!」、「社会科が好き!」という子どもたちが一人でも多く増えるように、本研究で得た貴重な財産をもとに、これからもさらに研鑽を積んでいきたい。

【参考・引用文献】

- (1) 桜井茂男『学習意欲の心理学』誠信書房、1997
- (2) 柴山直・小嶋妙子『児童の学習意欲に関する研究 ―自己効力感との関連について―』  
平成18年度新潟大学教育人間科学部紀要、2006
- (3) 桜井茂男・桜井登世子『児童用領域別効力感尺度作成の試み』奈良教育大学教育研究紀要、1991
- (4) 安野功『社会科授業力向上』東洋館出版社、2006
- (5) 辰野千寿『学習意欲の高め方』図書文化、1977
- (6) 上条晴夫、江間史明『ワークショップ型授業で社会科が変わる』図書文化、2005
- (7) 江間史明『活用力を育てる授業 ―体験と言葉でつくるワークショップ型社会科授業―』図書文化、2008
- (8) 濱田良彦『子どもが意欲的に追究する小学校歴史学習の研究―「地域の人物」の活用を通して―』  
熊本県教育センター、2000